

中世蒙古語の漢字音訳と「蒙古字韻総括変化之図」

吉池孝一

(拓殖大学外国語学部)

A relationship between the transliteration of Middle Mongolian into Chinese character and a diagram of *Meng-Gu Zi-Yun Zong-Kuo Bian-Hua Zhi Tu*
蒙古字韻総括変化之図

YOSHIIKE Koichi

1. はじめに

パスパ字は、元の世祖フビライがチベット出身の僧パスパに命じて作らせ至元6年(1269年)に公布した表音文字である。元朝統治下の諸言語を同一の文字で書き表すために作られたと言われ、現在目睹し得る資料のうち主要なものは、パスパ字で蒙古語を記したパスパ字蒙古語資料と漢語を記したパスパ字漢語資料である。

図1



ある。

今回扱う『蒙古字韻』(校訂者である朱宗文の序年は1308年)¹⁾は後者に属す。元代の何らかの漢語音²⁾に基づき同音と目される漢字を一まとめにしパスパ字でその音形を記した韻書形式の書物である。この書には「蒙古字韻総括変化之図」(以下「総括図」と略称する)と題名が付された円形の図(図1)が1枚収められており、そこにはパスパ字と漢字が記されている³⁾。『蒙古字韻』はパスパ字漢語資料であるから「総括図」のパスパ字も漢語音を示すものと期待されるが、本図には漢語の表記に使用されないパスパ字が含まれており、パスパ字と漢語音が一致しない部分もある。蒙古語の音節初頭子音を記したものと仮定しても漢語音との間に齟齬を生ずる部分がある。検討の末、本図にはパスパ字蒙古語の音節

末子音と音訳漢字が含まれており、その漢字による音訳の仕方の中には『華夷訳語・甲種本』や『元朝秘史』の音訳法と共通した特徴を持つ部分があるとの結論をみた。

明初の漢字音訳蒙古語資料である『華夷訳語・甲種本』や『元朝秘史』は中世蒙古語の最重要文献であるといわれ、その漢字音訳法は、前後に例を見ない精緻なものとなっている。この精緻な音訳法は、明初に忽然と現れて消えていったとの感があるが、如何にして確立されたのか。またこのような音訳法により漢字に音訳された『元朝秘史』の直接の底本はどのような文字で書かれていたのか、パスパ字であったのかウイグル字系統の文字であったのか、などの問題が漢字音訳蒙古語資料と共に我々の前にある。「総括図」がパスパ字蒙古語の音節末子音の漢字音訳法を示したものであるとの本稿の結論が認められるならば、上記の問題を解くための資料が1つ追加されることになる。

2. 「総括図」下半分について

図2は「総括図」の下半分に記された漢字、及びパスパ字をローマ字に翻字したものである（パスパ字のローマ字への翻字および転写はすべて Poppe(1957)の方式による。ただしポッペの翻字「ma, da, qa, …」等は説明の便宜のため「m, d, q, …」のように母音 a を補わずに記す場合もある。これ以後、翻字を「」、転写を（）、音声記号を[]で示すことにする）。

図 2

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
噲	撲	本	噲	黒	頂	転	刻	克	忒	赤	四	卅
口		音	口		舌	舌						
					児	児						
「m	p'	・	b	q ⁴⁾	l	r	k'	g ⁴⁾	d	č	s	š」

先ず、本図の性格を良く示す no.5「q」と no.7「r」をご覧いただきたい。これらは蒙古語の表記に使用されるもので漢語の表記には使用されない。これは本図が蒙古語と何らかの関係のあることを示すものである。

no.1, 3, 4, 6, 7 ではパスパ字1字と漢語による説明的な注記が対応している。no.1 と no.4 の注記「噲口」は「口に含む」音という意で、いずれも唇を使う発音の「m」「b」の説明と解すことができる。no.3「本音」の意を直観的に理解するのは困難である。これについては少々考えもあり第6節で述べることにする。no.6「頂舌児」に就いては、類似した表現が『華夷訳語・甲』の「凡例」に、「頂舌音。舌尖を上顎に持ち上げて読む（・・・頂舌音也。以舌尖頂上齶読之）」と

ある。これより本図の「頂舌児」も、舌尖を上顎に持ち上げて発音する「児」⁵⁾の意であり、対応する「l」の説明と解すことができる。no.7「転舌児」は舌を転がす「児」⁵⁾の意で蒙古語のふるえ音「r」の説明と解すことができる。

no. 2, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 13ではパスパ字1字と漢字1字が対応している。この「総括図」の漢字が『蒙古字韻』本文中で如何なるパスパ字により注音されているか並べ示すと以下の通りである。

	2	5	8	9	10	11	12	13
「総括図」	撲	黒	刻	克	忒	赤	四	卅
	「p'	q	k'	g	d	č	s	š」
「本文」	「p'	h	k'	k'	t'	č'	s	š」

no. 2, 8, 12, 13⁶⁾はパスパ字と漢字音が一致し、no. 5, 9, 10, 11はパスパ字と漢字音が一致しない。no. 11の「č」は「č'」の誤写と考えるが⁷⁾、それ以外の不一致については何らかの説明が必要となる。実は、このパスパ字と漢字音の不一致が「総括図」の用途を説明する鍵の1つとなるのである。説明の便宜のため、先ずno. 9とno. 10、次にno. 5に言及する。

3. 音節末子音「g」「d」と音訳漢字

現代蒙古語の音節初頭の閉鎖音と破擦音には有声或いは半有声のものと無声或いは無声有気のもの2系列の子音が認められるが、これと同様にパスパ字及び漢字により記された中世蒙古語にも2系列の子音があったとされる。論者には当時の音価の詳細を論ずる準備はないが、2系列の子音を便宜的に有声・無声としても議論にとって大きな障害とはならないと考えるので、これ以後有声音・無声音と称することにする。

さて、服部(1946)で明らかにされた『元朝秘史』の音訳漢字の用法によると、清音(無声無気音)の漢字は蒙古語の有声音に対応し次清音(無声有気音)の漢字は蒙古語の無声音に対応し濁音(元代以降の北方漢語では声調の違いにより無声無気音と無声有気音に分岐する)の漢字は蒙古語の有声音と無声音の両者に対応するという。パスパ字蒙古語や漢字音訳蒙古語をみると、例外は少なからずあるが、音節初頭ではほぼ、「g」「d」等で翻字される有声音相当のパスパ字には清音と一部の濁音の漢字が対応し、「k」「t」等で翻字される無声音相当のパスパ字には次清音と一部の濁音の漢字が対応する。然るに、「g」「d」が音節末に位置した場合は規則的に小字で書かれた次清音の漢字が対応する。「b」と共に語例を示すと以下の通り⁸⁾。なお、表中で*を付したものは子音で始まる語尾を有する語の動詞語幹である。また、問題となっている箇所は__で示す。

「パスパ字蒙古語資料」	『華夷訳語・甲』	『元朝秘史』
「qub-č'i-ri」 税 「b」	中忽 _ト 赤 _舌 鄰 [p] ⁹⁾	中忽 _ト 赤 _舌 里 [p] ⁹⁾
* 「'b」 (ab) 取る 「b」	阿 _ト [p]	阿 _ト [p]
「č'e-rig」 軍隊 「g」	扯 _舌 里 _克 [k']	扯 _舌 里 _克 [k']
* 「'eog」 (ög) 与える 「g」	斡 _克 [k']	斡 _克 [k']
「no-yad」 官人たち 「d」	那顏 _楊 [t']	那牙 _楊 [t']
* 「du-rad」 想う 「d」	都 _舌 刺 _楊 [t']	都 _舌 刺 _楊 [t']

ただし、語末が子音で終わっていても母音で始まる何らかの語尾が付くと次に示すように語末子音は次の母音とともに1単位を成し音節初頭子音として扱われ、有声音に当たる清音の漢字で音訳される。なお「パスパ字蒙古語資料」には対応する好例がないため省略した。

「パスパ字蒙古語資料」	『華夷訳語・甲』	『元朝秘史』
取り 「b」	阿 _奔 [p]	阿 _奔 [p]
軍隊の 「g」	扯 _舌 里 _昆 [k]	扯 _舌 里 _昆 [k]
官人たちから 「d」	那顏 _{蒼察} [t]	那牙 _{蒼察} [t]

パスパ字蒙古語の「g」「d」が音節末に位置した場合、漢字音訳蒙古語では次清音である「克」「楊」が用いられておりパスパ字と漢字音は一致しない（このような不一致が生じた原因については私は明らかにし得ないが第5節で少しくふれる）。これは「総括図」の no.9「克 g」、no.10「忒 d」におけるパスパ字と漢字音の関係と同じものである。「総括図」中のパスパ字と漢字音の不一致の問題は、「g」「d」が蒙古語の音節末子音でありそのパスパ字蒙古語に対して一定の音訳法にしたがって漢字「克」「忒」を付したと解すことにより解決することができる。

4. 音節末子音「q」と音訳漢字

「q」は蒙古語の表記に使用されるもので漢語の表記には使用されない。パスパ字蒙古語の「q」は現今の蒙古文語で q, γ (或は g) と転写される文字にほぼ対応する。q と γ に当たる音は音節の初頭では13～14世紀にあっても互いに区別され得る音であったとふつう考えられているが、パスパ字蒙古語や『元朝秘史』の漢字音訳蒙古語では何故か区別されない。『元朝秘史』では曉母 ([x-])・匣母(中古の有声音に由来するが元代以降の北方漢語では [x-]) や見母 ([k-])・

溪母（[k'-]）の字に小字「中」を付して「中合」「中崑」のように音訳されるが、前者の摩擦音を有する漢字を用いる方が普通である。パスパ字蒙古語や漢字音訳蒙古語の状況を考慮した上でその具体的な音価を決定するのは容易ではないと考えるが、蒙古語現代方言よりみて何らかの後部軟口蓋音であったことは推測し得る。一方、音節の末尾にあっては蒙古文語で γ と転写される文字に対応し、 q と γ の対立はない。その音価は蒙古語現代方言よりみて有声音相当の音であったと考えられるが『華夷訳語・甲』や『元朝秘史』では「黒」（無声摩擦音 [x-] を有する。）の小字で音訳される。

「パスパ字蒙古語資料」	『華夷訳語・甲』	『元朝秘史』
「qa-muq」 全ての	<u>中合木黒</u>	<u>中合木黒</u>
「jar-liq」 聖旨	(札兒里) ¹⁰⁾	札 ^舌 兒里 ^黒

ただし、語末が子音で終わっていても母音で始まる何らかの語尾がつくと、次に示すように語末子音は次の母音とともに1単位を成し音節初頭子音として扱われるのは前節の「g」「d」の場合と同様である。

「パスパ字蒙古語資料」	『華夷訳語・甲』	『元朝秘史』
「jar-li-qun」 聖旨の	札兒里 ^中 黒	札 ^舌 兒里 ^中 渾

この「黒」という字は『華夷訳語・甲』や『元朝秘史』で音節初頭での使用例は一つとしてなく音節末子音「q」の専用字となっている。「総括図」の no.5「黒q」におけるパスパ字と漢語音の不一致の問題は、「q」が蒙古語の音節末子音であり「黒」はそれに対する専用の音訳漢字であると解すことにより解決することができる。

5. 「総括図」下半分と「華夷訳語凡例」

『華夷訳語・甲』（1389年序）に興味深い「凡例」がある。この「反例」には蒙古語を漢字で音訳する際の細則が記されており¹¹⁾、そのうち次に挙げる音節末子音の条項は「総括図」と無関係ではないと考える。

- ア 一、字の傍らに小さく「丁」と注記したものは頂舌音であり、舌尖を上顎に持ち上げて読む。「丁温」「丁兀」「丁豁」「丁幹」などがこれである。
- イ 一、字の下に小さく「勒」と注記したものは頂舌と同じである。「氷」を「莫勒孫」などと称するのがこれである。
- ウ 一、字の下に小さく「黒」「楊」「克」と注記したものは、みな急読する帯過音【付随的な音：論者注】であり、読出する必要はない。
- エ 一、字の下に小さく「ト」「必」と注記したものは、みな急読する合口

音【両唇音：論者注】であり、これも亦読出する必要はない。¹²⁾

ここで、パスパ字のローマ字翻字を利用して蒙古語音を示しつつ「凡例」の解説をすると次のとおりである。アは [-n] 等の韻尾（音節末の子音及び半母音）を有する漢字の左肩に小字「丁」を付して [n]等を「1」に読みかえる方法を述べたものである¹³⁾。イは漢字の右下に小字「勒[1-]」を付して直接「1」を表記する方法を述べたものである。ウは漢字の右下に小字の「黒」「惕」「克」を付して「q」「d」「g」を表記する方法を述べたものである。エは漢字の右下に小字「ト、必」を付して「b」を表記する方法を述べたものである。以上4条の規則は蒙古語音節末子音の漢字音訳の方法である。この音節末子音の音訳法を述べた部分と前述の「総括図」との間に興味深い類似点を見いだすことができる。

「華夷訳語凡例」	「総括図」
ア 「頂舌音」，イ「勒。頂舌と同じ」	no. 6「頂舌児 1」
ウ 「黒」	no. 5「黒 q」
「惕」	no. 10「忒 d」
「克」	no. 9「克 g」
エ 「ト」「必」。「合口音」	no. 4「噶口 b」

ウの「惕」と no. 10「忒」の声母（音節初頭子音）は同一であり、エの「ト」と「必」の声母はともにパスパ字「b」にあたる。

これらの内、アと no. 6の「頂舌」という表現は漢語音韻学における一般的な用語ではない。このような一般的でない表現における一致は「凡例」と「総括図」が何らかの関係を有することを示す。また、前節で「総括図」の no. 5「黒」、no. 9「克」、no. 10「忒」を蒙古語の音節末子音であるとしたが、「凡例」の示す音節末子音も「黒」「惕」「克」であり3つのうち2つまで字面が一致する。このような「凡例」と「総括図」の類似は、「総括図」の no. 5「黒」、no. 9「克」、no. 10「忒」を蒙古語音節末子音であるとした前節までの結論を支えるものとなる。

第3節で言及すべきであった問題についてここで少しく触れる。有声音が推定されるパスパ字蒙古語の音節末子音に無声音に当たる漢字が対応している例に「g」「d」があった。このようなパスパ字と漢字音の不一致が生じた原因はどこにあるのか。何らかの文字運用上の問題であるのか或いは音声が関与しているのか私は明らかにし得ない。ただし、「華夷訳語凡例」のウの条項をみると「黒、惕、克」を一まとめにして「急読する帶過音であり、読出する必要はない」とし、「ト、必」の方は「急読する合口音であり、これも亦読出する必要はない」とする。前者「黒、惕、克」は後者に対して「帶過音」という音特徴を有していたこ

とが分かる。「合口音」は伝統的な漢語音韻学の用語にもみえるものであり「両唇音」の意であるとして異論はないと考えるが、「帶過音」は漢語音韻学の一般的な用語ではない。これを「付随的な音」の意と私は解する¹⁴⁾。この解釈が認められるならばパスパ字と漢字音の不一致の問題に「帶過音」という音特徴が関与している可能性もでてくる。また蒙古語現代方言では音節末の有声相当の子音が無声化する向きにあるという。このような現象との関係も問題となるのかもしれない。有声音が推定される音節末の「q」と専用の音訳漢字「黒」([x-])との関係については、当時の北方漢語に於いて軟口蓋の摩擦音には無声音1種しかなかったこともあって、「g」「d」とは同列に論じられない。

6. 「総括図」下半分と『元朝秘史』の音節末子音

前節で「総括図」下半分の13子音の内 no.5「黒」、No.9「克」、no.10「忒」を蒙古語の音節末子音としたが、私は以下に述べるところにより、他の10子音も音節末子音を表記する為に用意されたものではないかと考えている。

「華夷訳語凡例」で示された小字「勒、黒、惕、克、卜、必」は蒙古語にあって漢語にない音節末子音を漢字で表記するための工夫であった。同様の小字は『元朝秘史』にも多数みられる。それは蒙古語音節末子音のうち、漢語に無いものだけでなく漢語にも有るのだが音節中の他の要素が不適当なためそのままでは使用しにくいものにまで及ぶ。そこで、「総括図」下半分に、『元朝秘史』の小字及び「児」(ふるえ音「r」にあたる。漢語に無い子音であるが小字とはなっていない)を対応させてみると以下の通りである。参考のため「パスパ字蒙古語資料」中に見える音節末子音も付した(図3)。

図3

総 括 図	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13			
	噶	撲	本	噶	黒	頂	転	刻	克	忒	赤	四	卅			
	口		音	口		舌	舌									
					児	児										
	「	m	p'	·	b	q	l	r	k'	g	d	č	s	š	」	
『元』	木	-	-	卜	黒	勒	児	-	克	惕	赤	思	失	你		
									乞				室			
「パ」	「	m	-	-	b	q	l	r	k'	g	d	-	s	š	n	」

注) no.11の「č」を「č'」に訂正すべき事については注7)を参照。

no.2「p'」、no.3「・」、no.8「k'」には『元朝秘史』に対応する小字がない。no.2「p'」はふつう漢語などの外来語の音節初頭子音として用いられるものであり音節末には出現しない。したがって『元朝秘史』には対応する小字はない。これは「総括図」下半分の全てが音節末子音であるとする仮説にとって大きな障害となるが、現段階では解決案はなく何らかの外来語を表記するために準備されたものかもしれないと言っておくしかない。no.3「本音・」の「本音」の意味を直観的に理解するのは困難であるが私は現在のところ次のように解釈している。パスパ字蒙古語の正書法では「m, d, q...」などの子音のみで「ma, da, qa...」の音を表し母音の a は表記されない。したがって、(jarliq 聖旨)は実際には「jr-liq」と記され、(jarliqun 聖旨の)は「jr-li-qun」と記される。「jr」のように子音が連続している場合ふつう2番目の子音「r」は音節末子音である。しかし「・」はそうではない。例えば、(ula・a 駅伝馬)は、実際には「u-l・」と表記される。「l・」は文字のつながりとしては子音の連続であるが「・」は音節末子音ではない。『元朝秘史』の音訳例「兀刺阿」からも分かるように「・」のあとには母音 a (本音に相当するか)を補い(la・a)としなければならない。このような「・」の用法を指して「本音」と注記したものと考えるのだが如何であろうか。この解釈が認められるとするならば「本音・」も音節末子音に関わる正書法上の記述であることになる。次に、no.8「k'」であるがパスパ字蒙古語の碑文に「g・ek'-deg-sed」(ge・ek'degsed と言われた)として現れる。しかしこれは「k'・eg-deg-sed」(k'e・egdegsed)とも記され、どちらの表記を採るかにより碑文群は2つに分かれるようである。『元朝秘史』は後者に属し「客額_克迭-」と音訳され、小字「克」は「g」に当たると見なすことができ「g」と区別された「k'」の音訳漢字はない。パスパ字蒙古語の「g・ek'-deg-sed」という表記が何に由来するか私は分からないが、綴りを見る限り音節末子音「k'」を有すると解すしかない。

最後に、『元朝秘史』には「n」にあたる小字の「你」という音節末子音があるが、「総括図」には対応するものはない。私は「総括図」のno.13「卅 š」の右隣の欠落部分に「n」とそれに対応する音訳漢字があったのではないかと想像している(図1参照)。

ご覧の通り未解決の部分もあるが、「総括図」下半分は、パスパ字蒙古語の音節末子音のうち、漢語に無いもの及び漢語にも有るのだが適当な音節がなくそのままでは利用しにくいものを列挙し、具体的な音訳漢字と注記を付したものであると一応考えておきたい。

7. 「総括図」上半分について

「総括図」上半分のパスパ字を図1向かって左から順に並べると次の通り。

1 2 3 4 5 6
 m n ŋ v y ʏ 亦是 é

no. 6 のパスパ字は碑文や「百家姓」では「'uən 元」などのように漢語の介音（わたり音の一種）の表記に使用されるもので「ʏ」と翻字され、「é」と翻字されるものとは字形が異なる。しかし、『蒙古字韻』では「é」はことごとく「ʏ」で写されており字形の上で両者は区別されない。『蒙古字韻』に限っていえば no. 6 の字形は「ʏ」でも「é」でもあり得るということになる。no. 6 を「é」であるとした方が「総括図」上半分を統一的に解釈できるので本稿ではそのように考える¹⁵⁾。no. 6 を「é」とすると、これらのパスパ字は「金 gim, 孫 sun, 東 duŋ, 老 lav, 怪 guay, 危'ué」にみられる漢語の韻尾（音節末の子音及び半母音）と一致する。なお、no. 5 「y」と no. 6 「é」はいずれも漢語の母音韻尾[i]に相当するものであろうが如何なる違いがあるのか私には分からない。あるいは服部(1984)が推測するように音価の違いではなく『蒙古字韻』編纂上の制約によるものかもしれない¹⁶⁾。

思うに、これらのパスパ字は漢語の韻尾を単に並べたてたものではなく「総括図」下半分の子音と補い合う関係にあるのであろう。つまり、パスパ字蒙古語（外来語を含む）を漢字で音訳するとき音節末の子音及びそれに準ずる半母音の音訳の仕方が問題となった。そこで、漢語の韻尾をそのまま利用して音訳し得るものを「総括図」の上半分に配し、漢語の韻尾に無いもの及び漢語にも有るのだが適当な音節がなくそのままでは利用しにくいものを下半分に配しこちらの方には具体的な音訳漢字と注記を付した。次に上半分に関わる音訳例を挙げる。

	「パスパ字蒙古語資料」	『華夷訳語・甲』	『元朝秘史』
no. 1 「m」	「qam-tu」共に	中 <u>含秃</u>	中 <u>含秃</u>
no. 2 「n」	「~-yin」(属格語尾)	~ <u>因</u>	~ <u>因</u>
no. 3 「ŋ」	「dèn-ri」天	<u>騰吉</u> 舌里	<u>騰格</u> 舌理
no. 4 「v」	「van-šiv-geuŋ」 <u>萬寿宮</u>	-	-
no. 5 「y」	「tay-du」 <u>大都</u>	-	-
(「yi」	「ta-layi」海	荅 <u>来</u>	荅 <u>来</u>)
no. 6 「é」	「'-uè」(a·uè)広大な	阿 <u>危</u>	阿 <u>爲</u>

no. 4 「v」と no. 5 「y」は漢語音の表記に使用されるものであるが no. 5 の方は少々解説が必要となる。パスパ字蒙古語は概ね 1 音節ごとに分かち書きされるが「ta-layi 海」の「yi」等は「la」とともに 1 単位として記される。一方、漢語系の単語は「tay-du 大都」のように「tayi」ではなく「tay」と記される。両者

は表記の形式を異にしており (Poppe(1957:27))、このことにより no.5「y」は蒙古語の降り二重母音の第2成分ではなく漢語の韻尾であることが分かる。しかし、「tay」に対する「大」、「layi」に対する「来」などをみる限り両者は同様の仕方で漢字で表記されているので、no.5「y」は或いは「yi」も含意しているのではないかと考えている。

8. おわりに

『蒙古字韻』の「総括図」下半分の no.5「黒 q」、no.9「克 g」、no.10「忒 d」はパスパ字蒙古語の音節末子音「q、g、d」に音訳漢字「黒、克、忒」を対応させたものであると結論を下した。その論拠は、「黒」は音節末子音「q」の専用字であるという事と、「克 g」「忒 d」は有声音にあたる「g」「d」に無声音にあたる「克」「忒」を対応させたもので、このような関係は『華夷訳語・甲』や『元朝秘史』の蒙古語音節末子音と音訳漢字の間にもみられるという事であった。循環論となる事を恐れずに結論から上記の論拠を見直すならば、この論拠は我々に何を語ってくれるのであろうか。「総括図」を含む『蒙古字韻』の成立は1308年以前である。したがって、『華夷訳語・甲』（1389年序）や『元朝秘史』（明初）と同一の漢字音訳法が、ほぼ80年も前に既に確立していたということになる。これは驚くべきことである。しかし、「総括図」が『華夷訳語・甲』や『元朝秘史』等の漢字音訳蒙古語と共に成立したか、場合によっては漢字音訳蒙古語の影響を受けてその後成立したという可能性もないわけではないので注意が必要である。『蒙古字韻』全編の中に「総」に当る漢字の字体として「總」と「總」の2種がある。「總」は上冊7葉右に「總目」として1つ、上冊9葉左に本文中の韻字として1つ、計2つある。一方の「總」は今問題となっている「蒙古字韻総括變化之圖」（これまで「総括図」と略称）の題目として1つだけ現れる（図1を参照）。「総括図」のみに現れる異体字「總」の存在は本図が後代に増補された可能性を示唆する¹⁷⁾。私は現在のところ後者の増補説に傾いているが、未だ考えるべき点もあり、その詳細を述べる事は他の機会にゆずりたい。

いずれにしても、本稿の結論が認められるものとするならば、「総括図」はパスパ字蒙古語と音訳漢字を同時に含むことになり、これまで別々に存在していたパスパ字蒙古語と漢字音訳蒙古語を直接結び付ける役目をはたす。この点において「総括図」は蒙古語史にとって貴重な資料であるといえよう。

なお、no.5「黒 q」、no.9「克 g」、no.10「忒 d」がパスパ字蒙古語の音節末子音であるという結論をふまえて、第6・7節で、「総括図」の上半分は、パスパ字蒙古語（外来語を含む）の音節末子音及びそれに準ずる半母音のうち、漢語の韻尾をそのまま利用して音訳し得るものであり、下半分は漢語の韻尾に無

いもの及び漢語にも有るのだが適当な音節がなくそのままでは利用しにくいものであると論じた。未解決の問題もあり確実な論証とは言い難いが1つの見通しとして提出しておきたい。

注

1) 本書の現存する唯一の伝本は朱宗文の序が付された写本であり大英図書館に所蔵されている。現在広く通行している関西大学東西学術研究所刊の写真複製本及びそれを底本とした諸本には韻字の欠落があり（原写本には存する）使用の際には注意を要する。このあたりの事情については吉池(1995)を参照されたい。なお本稿では、大英図書館のマイクロフィルムより近年直接焼き付けた『蒙古字韻』を使用する。

2) 南方音説、北方音説等がある。この点については中村(1994)に興味深い論が展開されている。

3) 本図には円周の左右2箇所に欠落が認められる。全体のバランスよりみて右の欠落の内側にも欠けた部分があり、そこには少なくとも一對の漢字とパスパ字があったものと思われる。しかし、これらの欠落を補ったとしてもこれだけでは題名に「総括変化」とあるが「総括」とも「変化」とも称し難い。本図がその名の通りであったとしたならば他にも欠落部分があると考えざるを得ない。原型がどのようなであったか今となっては知る術はないが、これと類似した図が『西儒耳目資』（1626年序）の中にある。「万国音韻活図」と「中原音韻活図」である。この2つの活図は内円と外円より成っており、それぞれの円に音節の構成要素がローマ字と漢字で記されている。円を回転させ内円と外円の音節構成要素の組み合わせを変えることにより様々な漢語の音節を作り出すという仕組みになっている。「総括図」も同様の仕組みを持っていたものと思われる。なお現存する写本『蒙古字韻』には、「総括図」以外にも各所に空白や字の代わりに丸印を記した部分があり、書写当時依拠した底本に既に少なからず欠落や不鮮明な部分があったものと推察される。この書は尾崎(1962)の考証により清代乾隆年間の書写になることが知られており、その際の底本は吉池(1993b)によると『恬養齋文鈔』（清末）で言及する今はなき刊本の蒙古字韻一巻であった可能性が高いという。

4) no.5とno.9のパスパ字形は、照那斯図・楊耐思(1987:161)でも指摘しているように普通の字形とは異なった部分があるが、それぞれ「q」「g」と翻字し得るものに相当する。

5) 或いは、「児」は「舌」の接尾辞であり「舌児」で1語であるとも解し得る。

6) no.13「卅 š」；『蒙古字韻』には漢語音を表記するために2種の「š」の字形が用意されている。審母（漢語中古音の無声摩擦音）に由来する漢字と禪母（漢

語中古音の有声摩擦音)に由来する漢字を表記するためのものである。「卅」(「世」の異体字)は審母の字であり、対応する「s」は禪母用の字形であるから両者は一致しない。しかし、それは漢語音の体系内での話しであり、パスパ字蒙古語では両者の字形を区別せず1種の「s」のみを用いるのでパスパ字蒙古語としては両者は一致すると言うことができる。

7) 「^ㄅ𠵹^ㄛ」は『蒙古字韻』本文で3箇所(上冊14葉右, 上冊22葉右, 下冊2葉左)に於いて「^ㄅ𠵹^ㄛ」のように不完全に書写されている。このように書写されることがあるからには「^ㄅ𠵹^ㄛ」と誤認されることも有り得ると私は考える。また、「^ㄛ」は漢語中古音の濁音(有声音)に由来する字に用いられるもので蒙古語の表記にはふつう用いられない。このことから「^ㄛ」の誤写とみた方がよい。

8) パスパ字蒙古語と『元朝秘史』に於けるこのような音節末子音の関係については照那斯図(1988:25-26)を参照。なお「パスパ字蒙古語資料」はPoppe(1957)及び照那斯図(1991)中の影印資料、『華夷訳語・甲』は涵芬楼秘笈本、『元朝秘史』は四部叢刊本を用いた。用例の検索にあたって以下の著書の索引を利用した。Poppe(1957), Mostaert(1977), 小澤(1993)。

9) これ以後、『華夷訳語・甲』と『元朝秘史』の漢字音は服部(1946:139-144)による。両書の漢字音の基礎方言が如何なるものであったか未だ定説をみない。したがって、不用意に既存の音価を採用するのは危険であるが、清音・次清音という音特徴は、いずれの方言であっても動揺は少なく過去現在を通じて一貫しているのが普通である故、便宜的に服部(1946)によっても問題は生じない。他の箇所でも音価を掲げるが、いずれも基礎方言の如何により本稿の論旨を左右する問題が生ずるとは考えられない種類のものである。

10) 『華夷訳語・甲』の中に「聖旨」と傍訳が付された漢字音訳蒙古語は16あるが、いずれも小字「黒」はない。この語に語尾が付くと「札兒里吉阿兒」「札兒里^中昆」のように音節末子音「黒」にあたる成分が現れるので本書の蒙古語基礎方言に「黒」にあたるものがなかったということではない。元代の「至元訳語」では音節末の「g」「q」にあたる子音は表記されないが(長田(1953))、このような音訳法が一部の単語に固定され『華夷訳語・甲』に伝えられたのであろう。或いは“黒”を意味する蒙古語のqaraには聖に対する俗の意味があるため「聖旨」の音訳漢字に「黒」という漢字面を用いることがはばかれたのかもしれない。『華夷訳語・甲』の「^中合^舌刺除(下民)」は「^中合^舌刺(黒)」からの派生語と考えられる。

11) この点については小澤(1994:188-226)を参照。なお本書からは幾多の知的な恩恵を受けている。

12) 一、字旁小注「丁」字者、頂舌音也。以舌尖頂上^𪛗音^鄂讀之。如「^丁温」、

「ㄊ兀」、「ㄊ豁」、「ㄊ幹」之類。

一、字下小注「勒」字者，亦与頂舌同。如氷呼「莫勒孫」之類。

一、字下小注「黒」字、「惕」字、「克」字者，皆急読帶過音也。不用読出。

一、字下小注「卜」字、「必」字者，皆急読合口音也。亦不用読出。

13) 『華夷訳語・甲』中の「ㄊ」を付された漢字は、1「温、安、延、綿、・・・」、2「迭、幹、豁、兀、孛」「格」、3「阿」の三種であるが、用例の大半は韻尾[-n]を有する1のグループである。

14) 「帶過音」もしくは「帶過」という表現は管見による限り辞典類に登録されていない。字面より「付随的な音」の意であろうと考えていた所、大方高典氏（拓殖大学）より「一筆帶過（ポイントを置かずに一筆でさっと流してしまう。ついでに説明する）」という語の「帶過」に当たるのではないかとお教え頂いた。これにより「帶過音」を「ポイントを置かずにさっと流す音」と解し、本稿では「付随的な音」と称することにする。なお「一筆帶過」は『現代漢語詞典 修訂本』（北京：商務印書館、1996年）に登録されている。

15) 私的な研究会のおり中村雅之氏（富山大学）より no.6 は「è」の誤写ではないかとの指摘を受けこのような考えに到った。

16) 服部(1984:121)；「『蒙古字韻』では/-aĩ/と/-əĩ?/は「佳撰」に収められているのに、-uε【=「uè」：論者注】/-uĩ/は-i/-i/, -hi/-i/, -ei/-i/と共に「支撰」に収められている。このために、/-uĩ/を-uj【=「uy」：論者注】と表記するわけにはいかず、-uε【=「uè」：論者注】という表記法を考え出したのではないか、というのが私の推定である。」。

17) 現存する『蒙古字韻』は複数の増補の層より成っており、その内のひとつの層は義注が付された韻字であり、『増修校正押韻積疑』或いはそれに極めて近い系統の韻書により増補されたものであるという。この点については吉池(1993a)を参照。

参照文献

服部四郎 1946 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂

_____ 1984 「パクパ字（八思巴字）について 一特に e の字と è の字に関して一（二）」『月刊 言語』Vol.13No.8.『服部四郎論文集 3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』（1989, 224-235, 三省堂所収）

慶谷壽信 1965 「入声韻尾消失の過程についての一仮説 —「蒙古字韻」からのアプローチ—」『名古屋大学文学部研究論集』X X X VII:149-186

Mostaert, A. 1977 Le Matériel Mongol du Houa I I Iu 華夷訳語 de Hougou(1389)I, édité par Igor de Rachewiltz.

- 中村雅之 1994 「『蒙古字韻』と『古今韻會舉要』」『富山大学人文学部紀要』
20:147-163
- 長田夏樹 1953 「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』4,2・
3:91-118
- 尾崎雄二郎 1962 「大英博物館本蒙古字韻札記」『人文』8:162-180
- 小澤重男 1993 『元朝秘史蒙古語文法講義』風間書房
_____ 1994 『元朝秘史』岩波書店
- パスパ字研究会 1994 『パスパ字漢語資料集覧』富山大学文学部中国語学研究
室
- Poppe, N. 1957 *The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script, Second
Edition translated and edited by J. R. Krueger, Wiesbaden, 1957.*
- 吉池孝一 1993a 「『蒙古字韻』の増補部分について」『語学研究』72:17-31.
拓殖大学語学研究所
- _____ 1993b 「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」『中国語学』240:31-40.
日本中国語学会
- _____ 1995 「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」『語学研究』
78:197-208. 拓殖大学語学研究所
- 照那斯因・楊耐思 1987 『蒙古字韻校本』北京：民族出版社
- 照那斯因 1988 「《蒙古秘史》漢字音訳本底本與八思巴字的關係問題」『民族
語文』1988,6:23-26.
- _____ 1991 『八思巴字和蒙古語文獻 I 研究文集, II 文獻匯集』東京外国
語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

summary

Between the preface and the main body of *Meng-Gu Zi-Yun* 蒙古字韻 (revised by *Zhu Zong Wen* 朱宗文 in 1308), there is a diagram that was titled *Meng-Gu Zi-Yun Zong-Kuo Bian-Hua Zhi Tu* 蒙古字韻總括變化之圖. What this diagram denotes and is used for, to my knowledge, has never been examined. On this point, I have come to the following conclusion.

In the main body of *Meng-Gu Zi-Yun*, there are Chinese characters and hp'ags-pa scripts that indicate Chinese sound; but the diagram does not denote Chinese sound. The diagram contains a rule of transliteration of Mongolian's final consonants (i.e., coda) into Chinese characters. This rule of transliteration and *Hua-Yi Yi-Yu* 華夷訳語甲種本's and *Yuan-Chao Mi-Shi* 元朝秘史's rule of transliteration have something in common.